ムールード・フェラウン『貧者の息子』

石浜裕子

【解題】

以下に訳出するのは、ムールード・フェラウン Mouloud Feraoun 作の小説『貧者の息子 *Le Fils du Pauvre*』（抄訳）である。訳本には、一九五四年にフランスのスイユ Seuil 社から出版された版を使用した。

この小説は、フランス語文学のひとつである、マグレブ文学（littérature maghrébine d'expression française, ou de langue française）の作品である。マグレブ文学は、二十世紀のポストコロニアル文学に含まれると考えられよう。フランス語マグレブ文学は多くの優れた作家を輩出している。アルジェリアの作家カテブ・ヤシンや、社会学者でもあるムールード・マムリ始め、モロッコ出身のゴンクール賞受賞者タハール・ベン・ジェルーン、チュニジア出身のアルベール・メンミなどが知られている。フランスに移住したマグレブ出身者の二世、三世にも文学活動をする者がたくさんいる。だが、こういった文学の例にもれず、作家の出身地では言語の問題などからそれほど読まれているとは言いがたい。ことにアルジェリアでは、独立後、強力にアラビア語化が進められたという事情もある。

残念なことに、フランス語マグレブ文学の日本語訳は非常に少なく、現代のフランス語文学において大きな位置を占めているにもかかわらず、日本では研究者以外にはあまり知られてい

ない。

ムールード・フェラウンは一九一三年、フランスのアルジェリア、カビリー地方のティジイベルに生まれた。ベルベル系のカビリー人である。最初、村の小学校でフランス語を学び、アルジェの師範学校を終えてからは、故郷カビリーの学校で教えた。一九六二年、アルジェリアの独立宣言直前、アルジェの社会教育センターで仕事中だったフェラウンは、独立に反対する極右勢力によって暗殺された。しかし、フェラウン自身は、急進的で行動的な独立の闘士だったわけではないことを付け加えておきたい。

『貧者の息子』はフェラウンの自伝的小説である。最初に発表されたのは一九五〇年で、自費出版によるものだった。その後、師範学校以来の友人であったエマニュエル・ロブレスの力添えなどがあって、一九五四年にフランスのスイユ社から再出版された。最初の版とスイユ版とでは、内容に違いがある。スイユ版では最後の三分の一ほどが削除された。自費出版本からの英語訳を参照すると、細部にわたって補筆や訂正が加えられたこともわかる。また、本作品は「家族」と「長男」という二部構成になっているが、それぞれの扉に引用されたエピグラフのうち、「長男」のものは変更されている。作家は、スイユ版で削除した部分に書き継ぎをして続編を出版する計画だったという。両者併せての自伝的小説の完成を見通しながら、ある程度の書きかえを行ったのだろう。

『貧者の息子』と作家フェラウンについては、他にもいくつか留意することがある。

フェラウンの言語は、もともとベルベル語系のカビリー語である。カビリー語には書記システムがないので、フェラウンが生まれながらに持った言語は、書かれることも読まれることもない言語であった。また、フェラウンはアラビア語を片言しか話せなかった。通常、アラビア語を話す者でも、たいてい読み書きはできない。フェラウンが読み書くことのできる言語はフランス語のみであった。さらに、小説という文学の形式は本来アルジェリア、カビリーにはなかった。このような環境において、書くことの欲望と意志が作家のうちに生じ、ついに小説作品に実を結ぶことになる事情は、物語のところどころにさりげなく挿入されている。『貧者の息子』が、フランス語学習の過程で読んだ小説の「模倣（ペスティシュ）」であることは作家自身が明らかにしているが、家族や学校についてのエピソードからは、ごく幼い頃から、想像すること語ることへの強い嗜好を養ったものがあったこと、学ぶことへの傾斜がひとりのカビリー人を共同体の外へと連れ出し、教師へそして作家へと押しやっていったことがうかがわれる。この幾重にも分裂した「原住民教師」の姿

が、さりげない形象にふと表れる。主人公は、小学校で初めて教わったカビリー人教師の印象を述べ、その服装について、「これ以上はないエレガントな」と語る。それは、作家も主人公も後に纏うことになる衣装で、「フランス人が着るスーツの上に、カビリーの人たちが着る真っ白いバーヌース(1)を羽織った」ものである。わずか数行のこういった細部の描写をこそ読み解いていかねばならない。

『貧者の息子』は、二部構成の前半「家族」と、後半「長男」では、主人公メンラッド・フルルの人称が異なることに特徴がある。「家族」では一人称、「長男」では三人称が使われる。

それぞれの本編前には前置きがある。「家族」の前置きでは、それが書かれたノートを教室にあった教師用の机の引き出しから発見した人物が、発表までの経緯を語り、「長男」の前置きでは、前半と同じらしい人物が再度現れて、語りを主人公の友人へと引き継ぐと告げる。こうして、伝記を語る者が交代する事情が説明される。後半は発見されたノートに書かれていたのではないことになる。しかし、後半を語ることのできた人物は誰なのだろう。フルルの親しい友人で、彼を知り尽くしていたという人物は、どんな言語でフルルの少年期を語ったのだろうか。この二つの前置きは、いずれも読者に向けて書かれたと考えられ、読者への直接の呼びかけもあるが、いっぽう、親しい者への二人称(tu)を使って、主人公のフルルにも話しかけるのである。そのため、いずれの前置きもそれほど長いものではないが、これが物語にどのような効果を生んでいるかは読み解きが難しい。

もう一つの特徴として、時制の問題がある。出来事を語る過去形に混じって、現在形が多く使われる。現在形は、カビリーの人と暮らしについての民族誌的記述の部分にはほぼ例外なく使われ、また、比較的短いセンテンスをテンポ良く並べ、現在形を多用して回想をありありと現前させる効果を生んでいる場面も多い。これは、前半部分に顕著であり、語りが主人公からその友人に渡されて三人称が使われる後半部分では、現在時制の使用は抑えられている。

前半は、「家族」という表題からうかがわれるように、親族と、それを取り巻くティジイベルの村が描かれ、母方の二人の叔母のうち、一人が亡くなり、それをきっかけにもう一人が失踪してしまうところで終わる。後半の「長男」では、フルルがさらなる教育を受けるために村を出て行く。人称と時制は、距離と深くかかわる。

各部分は、番号だけが付された、やや長い断片から成るが、必ずしも時間軸に沿って出来事が並べられているわけではない。フェラウンの散文は、勤勉なフランス語学習者が「一生懸命書

いた」ような書きぶりであり、民族誌的な記述が一見淡々と続く部分も多いため、この小説はリニアで単純な読みやすい作品と受け取られてきたようだが、実際には、物語内容の安易な読みでは知ることのできない、構成上、言語上の複雑さを持っている。三人称・現在形を用い、断片を並べた自伝的作品である、クッツェーの『少年時代 *Boyhood*』や、ノートに書かれた〝作文〟である、アゴタ・クリストフ作『大きなノート *Le Grand Cahier*』（日本語訳表題『悪童日記』）以下の三部作を並列参照することもできよう。

この作品は、マグレブのフランス語文学としては最初期に書かれたものだが、フランス語を教える者フランス語で書く者が何を負わされるかが、自己自身に向けた批判さえ込めて、すでに示されているようである。

ところで、人称と時制は、日本語表現が最も苦手とするところである。翻訳に当たっては、原文における使用を尊重しながらも、直訳よりは、記述あるいは描写の再現をこころがけた。過去の出来事が現在形で書かれた部分では、話と文の流れを邪魔しないことを考えて、場面が、いまここで想起されるような配慮をできるだけしたつもりである。四角ばった成句表現や、構文が用いられた部分は、ゴツゴツとした手ざわりのまま、あえてこなれない翻訳をした箇所もある。

日本語に移し替える作業をしないままこの小説を読んだ時には、物語のあとをあわただしく追いかけただけであった。一つ一つの文、文相互のつながりを把握しようとする、力のいる作業の過程でこそ、読解の糸口が見えてくるようなことが何度もあった。翻訳としてあてた日本語の文にそれが十分反映されたかどうかわからない。しかし、『貧者の息子』という慎ましい表題のこの小説の奥行きが、翻訳作業の過程でより見えてきたとは言えよう。

紙数が限られているため物語の経過を示すことは難しいが、前半「家族」の最初にある故郷の村の描写、住民同士の争いごとの慣習的な解決法、母の妹である叔母たちの思い出、後半「長男」の父の病の部分を取り出してみた。

【日本語訳】

家族

私たちは、年老いるまで人のために働く。
自らにその時が訪れたなら、つぶやきさえなく死に、
あの世にいってから語る。
私たちは労苦に耐えた。

私たちは泣いた。
私たちは長く苦い年月を生きた。
そして、神が、私たちを哀れんでくださる……

A・チェーホフ

1

メンラッドは、山地カビリー地方出身の慎ましい教師である。彼は、《盲目の者たち》にまじって生活している。しかし、自らを王のごとくに思いはしない。それは、まずは民主主義を信じるゆえであり、自分は天才ではないという確信ゆえでもある。己についてのこのように厳しい考えに至るまでには、長い歳月が必要だった。だからといって、彼の能力が減じたわけではない。むしろその逆である。

勉学を終えて後、教壇に立った初めの頃から、彼は日記に打ち明け話をするようになる。ここにその一冊がある。「私自身に戻って、私の置かれている状況を私自身の価値に応じて考えてみるとき、私は厳しい結論を出さざるを得ない。私は傷ついた。方法を欠くことが、何よりも危険の大きい障害だ。しかし、私は結論をそこで終わらせるつもりはない！　私は、己のうちに強い知の力を感じる。古い本や昔のノートをたずさえていれば、もっと先へと進めそうだ。」「もう、決定はなされた。きっと、うまくいくに違いない。ロンサールやプレイアッド派について初めに学んだことを反芻するにつれ、私の意志はより強固になり、これから立ち向かう試験に取り組みやすくなる。」

メンラッドは野心に満ちていた。彼は己の野心を嘲笑した。彼には不幸というものがわかっていたのだ。驚のごとく滑空してやろうと思えば思うほど、鴨のように、泥水の中をもがき進むほかなくなるということである。

そうして、彼は、己が生まれたと同じような村で、教室が一つしかない学校で、兄弟のような農民たちに立ち混じり、彼らとともに生きる苦しみに耐え、決して動じぬ魂をもち、彼らと同じく断固たる運命論、すなわち揺るがぬ確信をもって、彼が言うところの、ムハンマドの天国へと迎え入れられる日を待ちながら、一介の教師に甘んじて生きることにしたのである。

この態度は、あらゆる点で賞賛に値するもので、懐疑論的な態度とは違う。哀れなメンラッドに、哲学する力はない。この態度は、自分は弱い者であるという、きわめて明確な認識の結果だった。試験を断念してから、彼は書き始めた。自分には書く力があると信じた。だがそれは、詩でもなく、哲学的論考でもなく、もちろん冒険小説でもなかった。彼には想像力というものがなかったのだから。しかし、彼はモンテーニュとルソーを読んでいた。ドーデも、ディケンズも（翻訳で）読んだ。彼

はこの偉大な作家たちのように、己自身の物語を語ることを、ただ単純に願った。私は、あなたがたに、彼は慎ましい、と言った！　このような天才たちに自らを比するような考え方とは遠いところにいた。彼は自画像をえがく、というばかげた考えだけを、彼らから借りようとしていたのである。筋が通っており、欠けるところがなく、読みうるものが書ければ、満足だと考えた。己の人生を、子供たちと孫たちには知ってもらってもよいと思った。だめならば、印刷できなくても仕方がない。彼は原稿をそのままにしておいた。

一九三九年の四月、復活祭の休みの間に、メンラッドは作業に取りかかった。幸福なる時！

適切でない語や不確かな表現、意味のよくつかめない形容詞の前に立ちはだかる、数え切れない障害が、言い回し一つ一つに、段落ごとにあった。彼は、分厚い学生ノートを埋め尽くす前に、おのが力を超えた企てをあきらめる。後悔や憤りの気持ちはなかった。

教室に、真っ黒になった小さな机がある。二つある引き出しの一方に、今日まで、その傑作は入れられたままだった。勤務日程表や下調べ用のカードの間に、親鳥にも兄弟鳥たちにも見捨てられて忘れられた、ズグロムシクイの五個目の卵のように。

だが、神よ、何人（なんぴと）も己の運命を支配することはできますまい！　もし天上で、メンラッド・フルルの物語は人々に知られる、と定められているなら、あなたのお決めになったことに、誰が背けましょう？

左の引き出しから、学生ノートを取り出して開いてみよう。フルル・メンラッドよ、私たちは、おまえの話を聞こう。

2

カビリー地方の最奥部にまで足を踏み入れようとする観光客は、心からそう思ってか、感興をくれた土地への義理がたい気持ちからかはわからないが、詩情あふれる風景を褒め、そこに暮らす者たちの暮らしぶりに親愛の情を示すことを惜しまない。

そういうものだろう。同じような感興、同じような詩情はどこにでも見いだせるのだから、人はその度に親愛の気持ちを示す。だから、どこか別の土地に見いだしたものを、カビリーにも見たとしても何の不思議があろう。

観光客のみなさんには大変申し訳ないが、あなたがたは、ただ観光客として通り過ぎていくだけだから、感興も詩情も見つけられる。うちに帰ればあなたがたの夢も終わり、敷居には、当たり前の日常があなたを待っている。

私たちカビリー人は、人々が私たちの郷（くに）を褒めるのはもっともだ、と思っている。不作法をすまいとして、私たちに美辞麗句をくれるのさえ好もしい。いっぽうで、私たちにはたやすく

想像できる。私たちの貧しい村の眺めが最も好意的な訪問者にさえ残す、何やら物足りない印象というものを。

ティジは二千人の住人がいる集落である。一つの尾根の上に、家々が互いの尻にしがみつくようにして建ち、その様は、有史以前の怪物の巨大な脊椎のようだ。二百メートルにわたって大路が一本あるが、それは部族の道の幹道にすぎず、そこから枝分かれしていくつもの村へとつながっている。大路は車の通れる道に通じており、最終的には、町へと通じている。

この大路は、片側だけに塀がある所では、当初の幅を残している。少なくとも、優に三メートルはある。両側に塀が作られている所も多いので、道幅は少しずつ削られて、石の牢獄にとらわれたような惨めな様になる。道はとぎれて消えてしまうこともあるが、そこここで右に左に枝分かれし、気まぐれな細い腕のようになったり、谷底を通って畑のほうへとのびていたりする。当然ながら、この大路の部分である小路は、大路と違う扱いを受けるよう求められている。大路が舗装されていないのに、なんだって小路を舗装する必要があるのか。どの道も、夏はほこりっぽいし、冬はぬかるむ。人通りが多いからだが、さらに、同じ理由でいつも汚い。唯一の違いといえば、小路は大路の娘で、だから親に似ていることだ。

ある特定の場所について、そこから逆方向に向かう二つの道を想像してみるといい。同一の点から、一方は左に、もう一方は右に行く。この特別な場所では、道幅が広くなっている。これは不思議な偶然か、それとも、現実の時を超えてなされた決定によるものだろうか、私たちの祖先は四つ角というものをつくらなかった。ここは村の広場だ。《音楽家たちの広場》といい、私たちが集まる唯一の場所で、高いところにある地区では、低いところにあるこの広場をうらやむ。

五十センチ四方くらいの片岩の板を、家の切り妻側の壁によりかからせるようにおおまかに積み上げて集会場所の腰掛けの役割をさせていて、大人も子供もやってきてはそこに腰を下ろす。すかし格子の屋根がある腰掛けが、とりわけみなのお気に入りだ。夏は涼しいし冬は雨風を避けられるから、みなそこに座りたがる。北の方から広場に出てくると、この腰掛けは左側にある。その正面には袋小路があり、二十メートル先は行き止まりで、一件の家の門がある。この腰掛けにはいちばんよい石が使われている。大理石だ。黄褐色の本物の大理石で、長年にわたって使われ擦れて光っている。村は三つの地区からなり、だから広場も三つある。どの広場にも石の腰掛けがあり、石板は光っている。あちこちの石板には、碁盤が刻みつけてあって、小石を使って遊ぶ。だが、《音楽家たちの広場》に匹敵する広場があると思う者はいない。

モスクも二つある。モスクは広場ほど大切な場所でないことは明らかだ。外から見ると、モスクは隣接する家屋と区別がつかない。内部の床はコンクリートで固められ、壁は石灰で白く塗られている。がらんどうで、悲しいほどに簡素。ここに祈りを捧げに来る老人たちの様子は、過ぎ去った時代を思わせる。

モール・カフェは村の外にある。行きたい者は、自分で場所を探して村の外へと出かけていく。

最近になって、気取った外観の家が何件か建ったが、フランスに行って稼いだ金をつかったものだ。こういう家は、あたりはばからず高々とそそり立つ正面玄関と赤すぎる瓦が、周囲一帯の古びたたたずまいの中でひときわ目を引く。こんな風景の中でのこの贅沢を、みな、場違いであると感じている。それに、私たちカビリー人は、こういうものをそれほど誇るべきとも思わない。遠くから眺めると、新しい家は白い染みのように見え、全体の土の色となじまない。私たちは、こういう家が、内部は他の家と似たようなものだと知っている。当然ながら、こういう家は《メナイエル(2)の厩》という蔑みの言辞を賜る。外側はぴかぴかと光っているが、中ときたら家畜がいて糞だらけだというのだ。

虚栄という悪癖は、ここでは、この上ない嘲りの種である。というのも、私たちはみな、とても近しい親戚縁者だから。

私たちの祖先は、他にすべもなく、寄り添って暮らすようになったらしい。孤立に苦しむあまり、ともに生きることがどれほどよいことであるかを推し量ることさえできなかった。隣人がいて、役立ち、手伝い、貸し借りし、助け、思い合う、少なくとも運命を分かち合うという幸運を！　私たちは孤立を死と同じように怖れる。それでも、喧嘩や諍いはしょっちゅうだが、ひとたび祝い事や不幸な出来事があると、それにともなって解消させる。《我々がいっしょにいるのは、楽園を求めてであって、不和のためではない》。これは、私たちがよくなじんだ諺だ。我々の楽園は地上の楽園にすぎなくとも、地獄ではない。

地区ごとにそれぞれの父祖をもつが、それは大して重要ではない。ずっと昔から、部族間で婚姻が行われてきたので、今では、一村の歴史は一個人の歴史のようになっている。特別な位階をもっていたり、貴族の称号を持つような家族はない。私たちにはいまも、みなの英雄を歌う詩がある。ユリシーズのように狡知に長け、タルタランのように誇り高く、ドン・キホーテのように痩せこけた英雄たちである。

例を挙げると、下の地区はメズーズの家の者たちである。メズーズには五人の男の子があったので、それぞれの名を、同じ部族の五つの家族の名とした。だから、その部族には、ラバー、スリマンヌ、ムッサ、ラルビ、カシという家がある。《バシレ

ン》は、先祖がジュルジュラから逃げてきた者たちである。バシレンの者たちは、この起源に誇りを持ってはいない。心の内では、そのことを思うといささか弱気になる。しかし、現在では、そんなことを考える者はもはやいないし、彼らも自らをメズーズの正当な末裔と考えている。にもかかわらず、何かしら大変に深刻な局面、大きな利害がかかっている場合に限って、それを思い出さざるをえないこともある。

私たちカビリー人は、こういった共通の、あるいは個別の起源を持ち、そして同じ条件を持つ。山地のカビリー人はみな一様に同じ暮らしをしている。貧しい者も金持ちもいない。……

とどのつまり、ティジではみなが相互によく知った者たちであり、互いに親密で、互いに嫉妬しあう。自分の船をできる範囲で操っているが、階級はない。こうして暮らして、どれほどの貧乏人が金をためて金持ちになれるのだろう。あるいは、何人の金持ちが、人々に尊敬され怖れられ忌み嫌われている高利貸しのサイードに破滅させられるのを待たずに、あっという間に貧乏人になってしまうのだろう。当然ながら、サイードにも順番は巡ってくる。物乞いとなって死ぬかもしれない。掟に例外はない。これは神の掟なのだから。この世にある我らはみな、貧窮も富も知らねばならない。年老いた者たちは請け合う、生まれたときの身の上のまま死ぬ者はない、と。自らも、それを生きてきたのである。……

5

……

間もなく、修道者二人と、十数人の村の長老らを従えて、村長がやってきた。ゆったりとした足取り、堂々とした厳粛な様子で、みなバーヌースに身を包み、一列になって狭い中庭を横切って来る。父は歓迎の意を伝え、お偉方の頭に、とがったフードの上から接吻する。……

話が始まる前の儀礼的な挨拶が交わされて、村長が話し始める。しかし、父がそれをさえぎる。

「ようこそ、我が家においでくださいました。夜は長い、まずは食事としましょう」

長老らは、礼を言って形式的に辞退する。が、先か後か、ともかく食べなくてはならないことはわかっている。この後、相手方にも行くのだから、もう一度食べなくてはならないとしても。ともかく、ラムダンがクスクスから始めようとする道理を彼らは考えたかもしれない。お偉方は、相手方のを食べるまえに、我々のものを食べることになる。父は父で、こんなことを考えていたのだ。誰にしても、一飯の恩を受けた者は裏切りはしない。さらに、我々の側に祝福を引きつけておくために、父は修道者二人に二十五フランずつを差し出した。不幸な出来事

によってもたらされた災いは、すべて追い払われた。もう何ともない、みなくつろぐ。うまいクスクス、うまい肉、長老らは喜んでそれを味わったし、話の後ではうまいコーヒーも供されよう。言いたいことは何でも舌に語らせられよう。そう難しい問題でもあるまい、もうすっかり落ち着きを取り戻した人々を説きつけるだけだ。

実際、アイト・アメールの者たちも私の両親も、事を込み入らせようとは思っていなかった。どちらの家も、己の名誉のために、筋の通った人たちだと思われたかった。そんな案配で、お偉方も、関係者が納得できる、威厳に満ちた遠慮ある態度を示していたのだ。……

形式に則り、村長は叔父に話をさせた。

「フルルが半死の状態で家に帰ってきました。私は、ブサドに事情を聞きに行ったが、まともな返事が返ってこなかった。殴り合いになりました。アイト・アメールの者たちは広場の近くに住んでいるので、みな出てきた。私は、ナイフで切られました。私の家の者たちもやってきて、くんずほぐれつになりました。それから、みなさんが来られたのです」。

説明は明快で正確だ。さらに、おのおのが細かいことに通じている。最初に口火を切る者は、明らかに我々に理があると言う。そうしておいて、後では相手方が正しいと言うのだ。続いて話す者たちも、おおかた同じ事を繰り返す。ちょっとした余談を出したり、何かになぞらえたり、そういった争いごと一般への非難があったりという程度で、ほとんど違いはない。言葉は修道者にあり！　二人のうちの一方が、ハンカチに包んだ、すすけて真っ黒になったアラビア語の本を取り出す。何やら訳の分からないことを読み、我々の上に幸運があらんことを祈り、お前たちが争いをやめなければ、すぐさま天罰が下ると言う。すぐに、祖母はふるえながらためらいがちに、そのありがたい本に唇をふれる。叔父も、古い羊皮紙の上に手を置いて、また争いごとをむしかえしたりはせぬ、と誓わされる。相手方でも、同じ宣誓が要求される。フランス人の裁判所に行っても無駄で、話がややこしくなるだけだ。もっとも、血が流されたことは事実なので、裁判官は事の子細だけは知ろうとする。村長は自分の懐から百フランを裁判官に渡して事を納め、その金は結局、我が一族と、アイト・アメールの者たちが負担することになる。

こういったことがすべて、私たちに話される。叔父はおしだまったまま、考え込んでいる。父は了承する。我々と相手方の今後の関係について、心配する者はいない。肝心なのは、もはや争わぬことだ。

お偉方は、我々を〝なだめ〟に来たのと同様、アイト・アメールの者たちを〝なだめ〟るために出て行く。そして、互いに

公認の敵となって、翌朝、目を覚ます。どちらも、高い代償を払ったものだ。

その後、両家の者は話をしなくなり、助け合うこともなく、カビリーのカゴ編みから根拠のない教訓を得たブサドが、面と向かって私に会うことは、当分の間なくなる。

6

私の母方の叔母ふたりは、私の両親と同じ通りに住んでいた。祖父のアフメドは、ふたりに、屋根裏の納戸もない平屋の小さな家を残した。家の隅っこには、胴のふくらんだ壺がでんと置かれていたが、叔母たちはこれをいっぱいにできたためしがなかった。屋根は低くて門は片開き、狭苦しい中庭の幅は男の背丈を超えないほどで、奥行きも正面入り口と同じくらい。キクイタダキのまるくて薄暗い巣の中のように狭ぜまとしている。しかしそこにいると、慎ましく穏やかな愛情の、やさしいぬくもりが感じられた。動くたびにさわる壁は抱擁してくれ、薄暗がりに置かれた物たちはほほえみかけてくるようで、陰気くさいことなどなかった。私の子ども時代の親しみ深い牢獄、あまりに早く過ぎたあの時代。

私は、叔母たちをよく知っていたのに、名前は後になるまで知らなかった。両親と同じで、名になど何の意味もない。従妹の口から、その父の名はルニス、私の父はラムダン、母はファトマ、彼女の母はヘリマというのを聞いたときの、嬉しい驚きを思い出す。しかし、一方では、この人たちをそう名指すのは他人であって、私たちには家族のみが持つ、もっとやさしい言葉があるということを、私はすぐに理解した。私にとって、叔母たちは、ハルティとナナだった。

ハルティが姉だった。ハルティはとても背が高くみえた、私の母にちょっと似ていたが、背は母よりも高かった。顔は細長く骨張っていて、突き出た頬は赤く、気まぐれな山羊の横顔を持っていた。大きな黒い目が美しく、どうしてもスカーフの中に収まりきらず、三つ編みにしてもはみ出して肩に落ちるほどの豊かな髪が印象的だった。母は慎ましやかでひかえめな容貌だったが、ハルティは野性的だった。

もうひとりの叔母に、私はナナという優しい名前をつけた。私が六歳のとき、ナナは二十歳だった。私の従姉のジュヘルと同い年で背丈も同じくらいだった。だが、ジュヘルの姉妹でも、ナナのほうがずっと美しいことを認めていた。ともかく、ナナはほんとうにやさしい人だった。界隈の女たちみなに愛され、《私たちのヤミナ》と呼ばれていた。父親からは甘やかされていて、姉ふたりが母がわり。ナナは人を従わせることが習い性になっていた。姉ふたりは、彼女なしでは何も決めることができないほどだった。家族の母であるファトマもナナの言うこと

は受け入れたし、ハルティも彼女に異を唱えることはなかった。今になってそのことを考えてみるに、母もハルティも、ナナに従うことで心の落ち着きを得ていたのではなかろうか。祖母の、ついで祖父の死以来、不安と心配で気の休まる暇のなかった母は、かわいそうに、一人では何も決められないような煮え切らない小心者になってしまった。母は良識と人生経験にてらして、一度はひかえめに反対するようなことはあっても、親しい人にはまず従い困らせることなどなかった。しかし、ハルティのほうは、良識をはみ出たところがあった。叔父のルニスと同じで激情的、だがルニスのほうがまだしも道理を心得ていた。ハルティはよく常識にはずれたことをする、自制のきかない人だった。こういう人が相手だと、近所づきあいをよくしようとしても、なかなかうまくいかない。ハルティのおかげで、一度ならず、アフメドの娘たちに対する従兄弟らの評判は失われるところだった。私の母は涙を浮かべてみせ、父は気の滅入るほど押し黙り、叔父は父親代りに支えとなって、実際、ハルティはいつもそれに守られていたのだが、それでも事は収まらないようだった。まあ幸い、《私たちのヤミナ》がいた。彼女の優しさに免じて、カシはハルティが女房を殴ったことを許してやった。別の従兄弟のアラブはののしられるままになり、別の親戚のアマルの連れ合いは、ちょっかいを出されても知らん顔していた。なんと心優しかったことか、ナナは。彼女の声には、人の心を鎮めるものがあった。

「ねえ、ハルティの言うことなんか聞かないで！　うちのお馬鹿さんなの、みんなのお馬鹿さんなのよ。我慢しなくちゃ。責めるなら私を責めて！　それにファトマも。でも、ハルティが訳の分からないことを言ってもほっといてあげて。すぐに自分が悪かったって分かるから！」

そうだった。いつだってハルティは自分の激しやすさを悔いた。そうして、苦しみ、泣き、償おうとした。それに、ハルティのやり方は人には真似のできない独特なもので、いつもうまくいくのだった。言葉をつくして仲直りを請い、熱を込めて己を非難し、親愛の情と、前日その情を捨て去ったときのあのあつかましさとを共存させて、相手を当惑させる。人は、本当に頭のおかしい女を相手にしていたのかといぶかしく思う。だいたいにおいて、みなだまされてしまう。そして、何度となく許し続けることになると重々承知のうえで、許してしまうのだった。こうして、絶えずハルティは人との関係をまずくしたり修復したりしていた。こんな振る舞いをしているために、結局、ハルティはずいぶん損をした。私たちは、こういう人をやさしい言い方で言う。無邪気なバカには何かがある、と。皮肉な意味はいささかもない。こう言われるにふさわしい者は、思った

ままを口にせずにはいられず、あまりに感じやすく、己には厳しく、他人を悲しませまいとし、己の得は考えず、傷つけることをおそれるあまり自らが傷つく。ものの分かった人はだいたい、そういう人のことを「子供なんだよ」と言う。ハルティは子供だった。死ぬまでそうだった。だから、ハルティの言うことと成すこと、理解できるわけがなかった。ハルティはいつもナナの言うことを聞いていたが、気分の変わりやすいガキのように不機嫌だった。彼女は偉大なる直感にかしずかれていた。ハルティには第六感がそなわっていて、彼女自身や彼女が愛する人たちに対する周囲の人の気持ちがはっきりと分かってしまうのではないかと、ときおり私は考えることがあった。目つき、そぶり、ほんの一言、感じ取れないほどの態度の変化でも、彼女には分かってしまうのだった。しかし、本人には、この才能を磨こうという考えもなく、それによって人より勝っているとも思わなかった。それどころか、彼女は感じたものを自分のうちにだけ秘めておいた。説明することもできなかったのだから、それを分け持とうとするのは無理なことだった。それに、あふれる感情を抑えることもできなかった。喜びも恨みも、愛と憎しみもあふれ出るまま、そうして最後に、すべてがおさまるのだった。……

告白せねばならないが、昔話こそが私を叔母たちの家に引きつけていたのだった。父も母も子供にお話などしてくれたことはなかった。夜、両親といっしょにいても、楽しいことなどひとつもない。子供にはさっぱりわからず面白くもない、計算だの計画だの話し合い。ときに語られる非難や悪口のせいで、私は隣人や親戚を憎んだりもした。ハルティといっしょなら、そんなことはなかった。お話の間、ハルティと私は別の存在になる。ハルティは想像の国を完璧に作り出すことができて、そこでは私たちが支配者なのだった。私は、王女との結婚を望む孤児を援助し、人食い女を打ち負かした小さなムキデシュ(3)の勝利の場に立ち会い、残虐なスルタンの罠にかからぬような賢明な受け答えをヘシャイシ(4)に耳うちする者になった。冬の終わりのない夜、両親の険しい顔つきやため息は遠ざかる。物語はハルティの口から流れ出て、私はそれをむさぼり呑んだ。夢も教訓も、私はこうして知ったのだった。正義の人と邪悪な者、強者と弱者、狡知に長けた者と愚かな者とを、私は知った。ハルティは私を笑わせ、そして泣かせた。きっと私は、家族の誰かに実際に不幸が起こっても、あれほど心を痛めはしなかっただろう。私のヒーローたちの運命は、両親の心配事以上に、私の心を占めていた。それというのも、ハルティ自身がすっかり心を奪われているようだったから。お話をするハルティは、自分の言葉を信じ込んでいるように見えた。甥とまったく同じに

笑いそして泣いた。結末があまりに悲しいときには、ふたりともつらさに胸が締めつけられたまま横になり、私は怖くてハルティにしがみついたものだ。ハルティの頭には、迷信がいっぱいつまっていた。私もたちまち、幽霊だの、死のサンダルや革袋、命日になると決まって聞こえる殺された者の叫び声や、疫病を告げる亡霊の行進に、ハルティと同じくらいに詳しくなった。山ウズラやヒワや猿やミミズクが変身することも知った。私の想像力はすべてを抵抗なく受け入れた。暗くなると、門にも扉にもしっかりと鍵をかけ、バヤとハルティに挟まれて布団にくるまっていれば、私はどんな話も聞くことができた。だが、たまたま外に出ようものなら、髪の毛は逆立ち鳥肌が立ち、狂ったように走り出すか、恐怖のあまりその場に立ちすくんでしまうのだった。私は、幽霊が後についてくるのを見た。確かに声も聞いたし、足音が尾けてきたこともあった。ハルティが語る話を聞く喜び！　だが、その代償ときたらどうだろう、私はいまでも怖くてたまらなくなることがあるのだ。どれほど、あれは作り事だと自分に言い聞かせてみても、死者の前で私が覚える忌避の感情をぬぐいさることはできない。これから先も、あのティジの広大な墓地を夜分に横切るという血も凍るまねをすることはできないだろう。ウルウルという夜鳥の鳴き声は、私にとっては常に変わらず陰鬱な響きであり、憂愁のしるしか、そうでなければ不吉な前兆に思われてならない。

それでも、私はハルティに感謝している。私は幼いうちから想像することを知り、思いのままにできる世界を作り出すのが好きになった。そこは、ひとり私だけが分け入ることのできる幻想の国だった。……

10

……

子供の頃の記憶というのは正確さに欠けていて脈絡がない。とりわけ印象的ないくつかの場面ばかり覚えていて、いつも、この場面とあの場面が繋がって思い出される。わけても鮮明に思い出すことのできる場面がある。それはこうだ。私だけが家で、母と一緒にいる。寒い日、冬だ。竈（かまど）の中では、オリーブの小枝がぱちぱちと音を立てて燃え、明るい炎を上げている。竈の内側に寄りかかるようにしてくべられた大きな薪が、その先端を炎の上に傾けている。炎はそれを包み込むようにめらめらと燃え、薪は少しずつ黒くなっていき、ついには炎に焼き尽くされようとしている。ナナが入ってくる、寒そうだ。私たちのほうへ、竈の側へと近づいてくる。ナナはピンクの小花模様のついた白いガンドゥラ(5)を着て、腰には木綿の腰布（フタ）を、帯の代わりに太い赤い紐で巻き付けている。……ナナが近づいてくる。物憂げな様子で無言のまま、心配事があるようだ。……

私の記憶の映画の中では、これはただちに次のような場面に繋がっている。冬の夕方、雨が降っている。道はぬかるんで、雨滴が音を立てる。泥水が細い川となって、道路を舗装した石板を縁取るように流れていく。小さな低い家々はよりいっそう低く見え、悲しげに肩を寄せ合い沈み込むように、暗くなる前から降りていた霧に紛れてかすんでいる。……

私は、母と姉妹たちの叫び声で不意に目を覚まされた。私の優しいナナが、ついさっき息を引き取ったのだった。私はその後ずっと、あの叫び声と、胸を締め付ける、この上ない不安を忘れることがなかった！　私はおののき、寝床から身を起こし、恐ろしさにうめいた。死を前にして女たちがあげる悲嘆の声を聞く度に、私はわれ知らず戦慄き震えるが、それはいつも、叔母の死を知らされたあの悲痛な目覚めを思い出させるからだ。

叔母は一昼夜苦しんで亡くなった。取り乱す姉たちの腕に抱かれたまま。彼女は、冷たくなった哀れなものを産み落としたが、それは、墓場へと彼女について行った。いや、それが彼女を墓へと引きずって行ったのだ！　宵のうち、小さな亡骸はその母親に張り付いたままだった。ナナは少しずつ衰弱していき、意識は刻々と薄れていった。間もなく、彼女はすっかり弱り切ってしまった。腹の中で、何かが破裂したような音がして、瓶をひっくり返したときのように、どくどくと血が流れた。少しすると、偶然に、そのできの悪い子供は完全に切り離された。神は私の叔母を哀れまなかった。命の舞台は死の幕切れを迎えたのだ。彼女は朝まで瀕死の状態だったが、最後の星とともに静かに消えていった。

婚礼の敷物の上に横たえられ、白い布を掛けられたナナの姿が目に浮かぶ。黄色い絹のスカーフが顎を支え、彼女の小さな顔をぐるりと取り巻いている。目は閉じられ、鼻がつまんであって、顔色はスカーフと同じくらい黄色い。眠っているのではないと、私には分かる。彼女は寝ているかのように見える、が、眠りにもいろいろある。疲労困憊の重く沈む眠り、穏やかに休らう健康な眠り、病人の辛い眠り。死は違う。死について考え、多くの死を目にして後に、私はいま改めて思う。ナナの顔は無表情だった。微笑みも憤りの名残もなく、苦痛も安らぎの現れもない。無。それこそが死である。親しき者の死、もはやどこにも、その存在を私たちに結びつけるものはない。亡骸よりも、いつもの場所に掛けてあるバーヌースのほうが、それを身につけていた者を思い出させる。優しかったナナの顔は何を語っているのか？　みなに愛され、みなにほほえみかけたあの美しい顔は。死が何もかも持ち去った。死は、想像の及ばない無関心の仮面を残した。それは、動かしがたい壁のように立ちはだかり、私たちの痛みは惨めにも跳ね返されて反響すら残さない。

……

長男

……

みなさん、お読みいただけたであろうか。以上が、メンラッド・フルルの罫線のある分厚いノートにあった断片である。この書き物の存在を知って読者にそれを知らせた語り手は、その後、この話を最後まで仕上げようと考えた。慎み深さからか遠慮からかフルルが沈黙したこと、ひとりの友人にペンを渡したことを、繰り返す必要があるだろうか。この友は、フルルのことなら何一つ知らぬことはない、好奇心旺盛でおしゃべりな親友で、悪意など毛ほどもない。誰もがほほえみを向けるし、誰に責められることもなく、フルルを裏切ることもない。

フルルよ、おまえについて全てが語られるとき、おまえはもう生きることを止めていよう。人生とは、何とも短いものなのだから。おまえの子供たち、そのまた子供たちは、おまえの苦しみを知るだろうか？　彼らが知ることは、よいことに違いあるまい。しかしまた、彼らにも彼らの苦しみがあり、愛する者があり、抗するものがあろう。彼らに与えるにふさわしいのはどんな教訓だろう。「教訓だって？　教訓などありはしない」。おまえはつぶやく。どこか諦めたような、おまえの穏やかな笑顔が目に浮かぶ。語り手が口をつぐむことを、おまえは望むだろう。しかし、その者のするがままにまかせよう。彼が抱く幻想は大きすぎはしないが、おまえをとても愛しているのだから。そして、おまえの人生を、他の多くの者たちと同じような人生を語るだろう。それとともに、フルルよ、おまえが野心家であったことや、身を立てることができたゆえに、それができなかった人たちを多少とも軽蔑しがちであったこと、そういうおまえだけの事情も語るだろう。

フルル、おまえは間違っている。というのは、おまえはひとつの特殊な例にすぎず、そうでない人々こそが教訓を与えるのだから。

1

……

十一歳頃のことだった。フルルの父親はひどい疲労から重い病気になった。それは、無花果収穫期の終わり頃のことだった。ラムダンはそれまで、畑で寝ずの番をして無花果の乾燥場を見張っていた。ある朝、彼は坂を上って家に帰ってきたが、目は落ちくぼみ、身体は熱く、唇には血の気がなかった。彼はうめき声をあげて、自分がやっとのことで背負って運んできた、トネリコの葉がつまった袋の上に崩れ落ちてしまう。急いで敷物が敷かれ上掛けが掛けられ、ぺちゃんこになったまるい枕があてがわれる。彼は横になって、何も食べたがらず、ずっとうめ

き続けていた。……

……病状は重かった。不幸はひとりではやって来ないもので、見張りをする者がどうしても見つからなかった、たった一晩に、何者かが小屋の扉を壊し、笊をあさって無花果をあらかた盗んでしまった。ルニスが家事をとりしきることになった。彼は、もう世話のできなくなった牛を売ることで持ち主と同意した。入った金の一部は病人の養生につかわれた。それも長くはもたなかった。セモリナ粉と肉が週に一回必要だった。二頭目の雄山羊も殺したし、時折、鶏も絞めた。ラムダンは回復期に入る前に破産した。ルニスは弟を助けるため是も非もなく金をつかったが、その甲斐はなかった。肉を持ってくれば、食べるのは子供たち、コーヒーを淹れても、病人はやっと一杯飲めるだけだった。ようやく食べられるようになったとき、ラムダンは食料も金もなくしていた。それで、彼は自分に力をつけるためと、子供らを養うために必要の半分ほどを借りた。冬のことだった。彼は、春までそうして借り続けなくてはならなかった。

美しい季節とともに体力が戻ってきたとき、彼は病気によって陥った己の苦境がどれほどのものか、おそるおそるはかってみた。悲惨が、彼の背に張り付いていた。彼は悲痛な心持ちで公証人のところに行き、借用書の下の部分に二つの拇印を押した。財産分割以来、初めてのことだった。畑と家を抵当に入れた。フルルの記憶が確かだとすると、この日は市の立つ日だったが、父は自身の不安を乗り越えようとするかのように、牛の臓物を数珠のようにつないだのを買ってきた。それは、家族みなにとって苦い味わいのするものだった。

それから間もなくのこと、ある朝、ラムダンは村を離れ、フランスで働くために発っていった。それは最後の手段だった。最後の希望、唯一の解決法だったのだ。国にとどまっていては、借金は雪だるま式に増え、一家のささやかな財産は雪崩に押し流されるようになくなってしまうことを、彼はよく承知していた。……

註

(1) burnous フードのついた袖なしの外套。

(2) カビリア西部の町、現在のボルジメナイエル (Borj-Menaiel) の名に由来すると思われる。メナイエルはベルベル語で騎士、騎手の意味だという（異説もある）。フランス統治時代には、交通の要所であるこの町に、馬を育成する廐があった。

(3) M'Quidech カビリアの伝統的な民話の人物。

(4) Hechaïchi カビリアの伝統的な民話の人物。

(5) gandoura 貫頭衣タイプの袖のない上着。

（いしはま　ひろこ／後期博士課程）